

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 31 日現在

機関番号：34327

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380672

研究課題名(和文)在宅がん医療における多職種間連携にかんする相互行為論的研究

研究課題名(英文) Interprofessional relations of nurses and care worker in end-of-life care

研究代表者

平 英美 (Taira, Hidemi)

京都看護大学・看護学部・教授

研究者番号：10135501

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：老健および特養、各2施設で働く職員に対し、看取りに関する意識調査と聴き取りを行った。その結果、(1)職員たちの看取りに対する意欲は高いにもかかわらず、達成感は低い。ただし、家族に看取られる場面を持たたときには最もやりがいを感じていた。(2)老健と特養を比較すると、老健の方が看取りについて課題があると感じている職員が多かった。(3)職員の大半を占める、看護職と介護職を比較すると、看護職は看取りになると介護職の関わりが減少し、連携が取れていないと考えていることがわかった。(4)患者のニーズに応じた看取りが目指されている。対象施設でもデスカンファランスの構築が進行中であった。

研究成果の概要(英文)：To clarify the characteristics of end-of-life care provided, we conducted a questionnaire survey at two special nursing homes for the elderly and two rehabilitation facilities for the elderly and interviewed care staffs.

(1) As a result, many subjects were willing to provide end-of-life care; however, a small percentage of subjects felt that such care has been sufficiently provided with high-level awareness. (2) Nurses and care workers had different views regarding life and death; therefore, profession-specific approaches need to be adopted. Concerning one's views of life and death, although many subjects thought about death, a small percentage of them, especially nurses, stated that they frequently talked about it. (3) Furthermore, significant differences in the awareness of end-of-life care were noted between the 2 types of facility investigated (special nursing homes for the elderly, and rehabilitation facilities for the elderly), and the latter reported more relevant

研究分野：社会学

キーワード：多職種連携 看護師 介護福祉士 ターミナルケア 介護老人保健施設

1. 研究開始当初の背景

近年、ターミナルケアはホスピスを初めとする医療関連施設および在宅医療に広く普及している。それとともに、その担い手は、医師、看護師などの医療職だけでなく、介護福祉士、ケアマネージャーなど福祉職を含み多様化している。そのような状況から、多職種間の連携が臨床現場の課題となってきた。とくに福祉職従事者は、介護がその業務の中心であり、医療職従事者ほどターミナルのケースを経験することは少ないと考えられがちだが、多くの高齢者福祉施設や在宅においてターミナルが日常化している現在ではそうとは言えなくなっている。ターミナルケアやデス・カンファレンス、そして医療職との連携について考えたいという介護福祉士の人たちとの出会いが本研究の出発点となった。

2. 研究の目的

本研究は、終末期の医療場面で医師、看護師、介護士、ケアマネージャー、患者、患者家族といった、当事者と多職種にわたる医療職、援助職従事者たちがどのように協働しているのかを分析することを目的としている。

3. 研究の方法

(1)介護老人保健施設(老健)と特別養護老人ホーム(特養)それぞれ2施設、計4施設で働く職員に終末期医療(看取り)に関する意識調査を実施し統計的に解析した。

(2)看取りについて、上記施設の職員にインタビューした。また、研究の中心対象となったA施設において、スタッフによるターミナル・カンファレンス、ターミナル委員会、そして新たな看取りの構築を目指す研究委員会のスタッフミーティングを採録した。

4. 研究成果

(1)老健および特養職員の看取りに対する意識調査の結果

わが国が高齢化と同時に多死社会になるにつれて、医療や介護の現場では看取りが急増している。そのため、職員を対象とした看取りに関する調査も見られるようになってきたが、これまでのところ施設横断的な大規模研究は少ない。そこで本調査研究では、特定の1施設ではなく、複数の老健と特養の職員を対象とし、比較分析が可能となることを目指した。したがって、質問紙も看取りの経験や困難さ、死生観などできるだけ多岐にわたる項目によって構成した。

対象者は計292名、有効回答数は202票(回収率69%)であった。

看取りに対する意欲と満足度

看取りに意欲のある職員は71.2%であったが、満足度については、十分に看取りができ

ていると感じている者は51.3%と半数程度に止まる。さらに、看取りにおいて意識して取り組んでいることがあるかには、50.5%が「わからない、どちらともいえない」と回答している。意欲がありながらもどのように看取りをすれば良いのかはまだ、手探り状態である。また、「専門職として死に慣れなければいけないと思うか」を問うと、肯定群と否定群がほぼ半分に分かれた。

これら意欲・意識・満足度については、特養と老健において顕著な差が認められた。特養では十分な看取りができていて、積極的に看取りを行いたいとの回答が多数であったのだが、老健はそうではなかったからである。老健は、リハビリテーションを受けながら自宅での生活を可能にすることを目的として支援を受ける「中間施設」である。つまり、医療行政上の違いが職員の意識の差にも影響していると考えられる。しかし、4施設の年間の看取り数はほとんど変わらない。老健からすれば、先行する特養の方法を参照しながら、看取りの体制を整備していくことが不可欠となっている。

看取りで重視されていること

看取りにおいては環境面・身体面・精神面のいずれもが重要視されていた。なかでも最も重視されていたのが、インフォームド・コンセント、つまり「家族への説明」であった。当初は看護職と介護職で清潔保持の項目等に差が出ると予想していたが、全てにおいて職種間の違いは認められなかった。

看取りのやりがい

「家族に看取られる瞬間の実現」が91.1%にのぼり最も高い割合だった。小楠ら(2007)も「共にいること」が最も重視されると指摘しているが本研究からもそれが裏付けられた。

看取りの困難について

看取りに対する不安やむつかしさについての認識は、とくに職種間の違いが際立っていた。

「看護と介護の連携がうまく取れていないと思うか」という質問には、職種間に有意差($p=0.010$)があった。介護職は取れていないとは思わないのに対して、看護職では取れていないという回答が多い。看護職はターミナルになると介護職からの関わりが少なくなると感じている($p=0.000$)。「急変時の不安」についてみると、看護職は39.5%であったのに対して、介護職では68.4%に昇($p=0.004$)。また、介護職は、「ターミナルの状態が長引くと患者をかわいそうだと思う」人が多く($p=0.007$)なり、「死に対して慣れなければならない」と思っている($p=0.024$)。とくに老健の介護職にその傾向が強かった。介護職が看取りにおいてどのような役割を果たせば良いのかが老健ではまだ統一されていないことがうかがえる。

そこで、改めて特養と老健の施設間比較を行うと、「末期の長期化が痛ましい

($p=0.002$)」「介護職の関わりの減少($p=0.000$)」「看護と介護の連携不足($p=0.005$)」「職員同士の意見の食い違い($p=0.007$)」「勉強の機会の不足($p=0.017$)」において有意な差が認められており、いずれの項目においても老健の方が否定的であった。

現状では、ターミナルケアへの取り組みや多職種連携の遅れといった課題は、老健の介護職に集約されているように見える。反対に、特養では、で指摘したように看取りへの意欲だけでなく、取り組みや連携が一定なされていると考えられる。この点は、職員への聴き取り調査からも裏付けることができた。ターミナルケアへの取り組みは、看護職の方が介護職よりも知識、経験とも豊富で先行しており、意識も高いと考えられがちだが、施設別で見るとむしろ看護職の人数が多い老健のほうが看取りへの取り組みに消極的であり、看護職と介護職の連携にも課題を抱えていることが浮き彫りになった。

看取りへの取り組み

「散歩」「グリーンケア」など「看取りにおける取り組み」9項目について訊いてみると、「すでに取り組んでいる」という回答が50%を越える項目はなかった。最も高かったのは「コミュニケーション」の48%であり、最も低いのは「宗教家による精神的ケア」の12.9%であった。いわゆるスピリチュアルケアはわが国ではそれほど普及していないことがわかる。

死生観について

死生観については12項目を訊いている。身近な人の死は、全体の82.7%が体験しているが、「『死とはなんだろう』とよく考える」と答えた職員は33%に止まり、家族や友人と死についてよく話す」になると13.9%にまで減少する。看取りを日常的に体験しているはずの職員たちでさえ死について互いに語り合うことは少ないのが実情である。

死をどのように捉えるかという死生観の確立は看取りに当たる職員にとっては利用者の死と積極的に向き合い、より良いターミナルケアを進めていく上では大切な能力でもある。看護職と介護職を比較すると、「死ぬことが怖い」では、看護職の肯定が40%と半数以下であるのに対して、介護職は69%であった($p=0.007$)。また、「死について考えることを避けたい」では、看護職が2.9%に止まっているのに対して介護職は24.2%となっている($p=0.004$)。ここでも職種によって死生観に大きな隔たりがあることがうかがえる。介護職もデス・エデュケーションを受ける機会を増やすだけでなく、同僚間、職種間で日常的に死生観について語り合う場を持つ必要性があると考えられる。

(2) その後の取り組み

質問紙調査の対象とした4施設のうち、A老健では調査結果を踏まえて、ターミナルケアにおける多職種連携の課題に取り組んで

いる。

そこで、その取り組みの一部を採録し、どのように連携を構築しようとしているのかを辿ってみた。

ターミナル・カンファレンス

A施設では、毎週1回ターミナル期にある患者についてカンファレンスを実施している。9回分を採録しているが、次のような点が共通する特徴として観察できる。1)まず、どのカンファレンスもイニシアティブを取って進めているのは看護師であった。参加者には、看護師、医師、介護福祉士、ケアマネージャーといった多職種が含まれているのだが、中心となって発言しているのは受け持ちの看護師である。2)したがって、看護師以外の宿主からの発言は非常に少ない。介護職も当該の利用者を受け持っているため求められれば発言するし、またコミュニケーションの流れの中でコメントが発せられる場合もあるが、ターミナル・カンファレンスのなかではほとんどの時間、聞き役に回っている。3)話し合われる内容は、とくにカンファレンスを主導する看護師の場合、利用者のバイタルの状態と実施したケアの報告が大半である。介護職の発言も看護師の発言を補足するものがほとんどである。一回だけだが、介護職から、利用者ではなく家族の様子についての報告があった。また、医師は疼痛のコントロールについて何度か発言している。4)ターミナル・カンファレンスの平均時間は4分弱である。業務開始の多忙な時間帯に、専ら利用者の状態を確認するためのものであることがわかる。

ターミナルケア委員会

A老健では、月に1回ターミナルケア委員会が開かれ、ターミナル期の患者にどのようなケアを行っているか、改善点はないかなどについて子細に検討されている。そのうちの2回分を採録させていただいた。1)この委員会では、1時間程度の時間をかけてじっくりと検討がなされるのでターミナル・カンファレンスでは出されなかったトピックスが次々と話し合われる。2)参加者はやはり、看護師と介護福祉士であるが、職種による発言量の違いは見られないと言ってよい。ターミナル・カンファレンスを進行していた看護師も出席しているが必ずしも発言量が突出しているわけではない。3)委員会では、ひとりひとりの患者の思いにまで踏み込んだケアをしようとしていることがわかる。例えば、飲酒の好きだった患者についての場面では、すでに飲酒は不可能になっているとはいえ「何か関わりを持ってないか」といったことが真剣に話し合われていた。また、「家族の意向」をどのように聞くかも委員会では問題になっている。この段階のA施設では家族を交えたデス・カンファレンスはまだ制度化されておらず、日常の来訪の際に家族からどのように意向を聞き出すかが問題だったのである。3)ある回では、上記のアンケート結果が

取りあげられ、新人がターミナルについて勉強不足と考えているのに対してベテランはやりがいを感じずマンネリ化しているという経験年数による差異が話題となった。その結果、勉強会を開催しようという提案がなされている。4)2 回に共通した論点として、ケアマネージャーや一部看護師だけでなく、看護職と介護職の「全員がケアプランを作れるようにしよう」という点があがっている。5)ターミナルケア委員会のミーティングはターミナル期の利用者への看護・介護のケアが深いレベルまで取りあげられている。ただし、家族の意向確認や新人教育など施設 = 組織としてどのように取り組むかについては課題として残されていることもわかる。

研究委員会

そこで、A 施設では、研究会で上記課題を研究対象として取りあげ解決をはかろうと試みている。採録したのは2回のみであったが、解決の方向性は示されていると思われる。1)1 回目の委員会から、いわゆる「センター方式」によるターミナルのケアマネジメントを施設に導入しようとしていることがわかった。センター方式は認知症を対象としたものが典型で、患者や患者家族とケアスタッフが協働でケアプラン作りをする点に特徴がある。A 施設が抱える、多職種連携、ケアについてのインフォームド・コンセントのシステム化といった課題を解決する優れた方法であると委員会のメンバーは判断しているのである。2)2 回目の委員会では、まず、認知症を対象に「センター方式」を実施している施設を見学した結果が報告される。これをターミナルケアへどのように応用するかについて直ちに結論が出ていたわけではないが、施設へ導入しようとする強い意欲が感じられた。3)委員会の構成メンバーは看護師と介護福祉士からなっているが、話し合いの中でも両者「チーム」としてケアに当たらねばならないことが何度か強調されていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

播本真一、中山良子、宮原奈津子、平英美、中島優子「介護施設における「職員の看取りに対する意識調査」第 30 回日本保健医療行動科学会学術大会、2015 年 6 月 20 日、京都看護大学、京都。

中島優子、平英美、播本真一、中山良子、宮原奈津子「ターミナルケアに対する職員の認識に関する研究 - 看護職・介護職の連携に焦点をあてて」第 30 回日本保健医療行動科学会学術大会、2015 年 6 月 20 日、京都看護大学、京都。

中島優子、平英美、中山良子、播本真一「介護職における多職種連携」第 23 回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会 in 横浜、2015 年 8 月 29 日、パシフィコ横浜会議センター、横浜。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平 英美 (Hidemi Taira)
京都看護大学・看護学部・教授
研究者番号：10135501

(2) 研究分担者

馬込 武志 (Takeshi Magome)
湊川短期大学・その他の部局等・教授
研究者番号：10390197

(2) 研究分担者

中島 優子 (Yuko Nakashima)
京都看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：50320057

(3) 連携研究者

()
研究者番号：

(4) 研究協力者

岩瀬 (旧姓中山) 良子 (Ryoko Iwase)
ユアハウス弥生

(4) 研究協力者

播本 真一 (Shinichi Hatamoto)
介護老人保健施設おおはら雅の郷

(4)研究協力者

小林 達生 (Tatsuo Kobayashi)
介護老人保健施設おおはら雅の郷

(4)研究協力者

宮原 奈津子 (Natsuko Miyahara)
介護老人保健施設おおはら雅の郷